水越家長屋門北側外観

昭和２５年頃の古写真

文化資料館調査研究報告(21)：61-70, 2012

水越家長屋門の建築とその背景

小沢　朝江(*1)

1 はじめに

水越家長屋門は、茅ヶ崎市高田の旧大山街道に南面して建つ。市街化が進む市内にあって、かつての景観を伝える貴重な歴史的建造物であり、すでに『茅ヶ崎の歴史遺産』[1] などでも取り上げられている。2011 年２月、文化景観を育む会（代表：山口洋一郎）および茅ヶ崎市都市部景観みどり課の依頼により、ご当主・水越雄二氏のご許可を得て、長屋門の実測調査を行った。水越家には、この普請に関する絵図や文書も伝えられており、本稿ではこれらを合わせ、長屋門の建築年代と特徴について検討する。

2 水越家について

水越家が所在する旧高田村は、近世には旗本の大岡家・長田家の分割知行地であり [2]、水越家は長田家の支配に属した [3]。

水越家の系譜については、過去帳が焼失したため江戸後期以前について詳らかではないが、墓碑銘 [4] 等を整理すると図１の通りである [5]。幕末期の当主五郎左衛門は大工と伝え、文政 11 年(1828)建築の三橋家住宅（旧所在地茅ヶ崎市香川、現民俗資料館）の普請を担当した大工・五郎左衛門がその祖先に当たるとされる [6]。次代の五左衛門は高田村の組頭で、慶応２年(1866)には領主・長田家より「名主介」を仰せ付けられており [7]、水越家は村役人を務め、幕末期には名主格の待遇を受ける有力家であった。さらに近代には、周辺の田畑を次々に入手して、当地域最大の大地主となった [8]。

宇八郎を経て跡を継いだ良介は、小笠原東陽が羽鳥村（現藤沢市羽鳥）に開いた私塾・耕余塾に学び、その先輩であった加藤松之助(1855-1924)を中心に、改新派の政治結社・松林協会を設立して政治活動を行った [9]。明治 24 年(1891)ー34 年まで松林村長を務め、高座郡議会議員を経て、明治 36 年の県議会議員選挙で当選、大正９年(1920)ー10 年には第３代茅ヶ崎町長に就任した [10]。こうした政治活動のかたわら、明治 32 年には相模肥料米穀株式会社を創業し、大正５年設立の高田養蚕組合の顧問も務めて、地域の農業・養蚕業の発展を支えた [11]。なお、良介の長男健は松林村収入役、続く梅二も茅ヶ崎市の収入役を務めるなど、歴代の当主が村政・市政に尽力している。

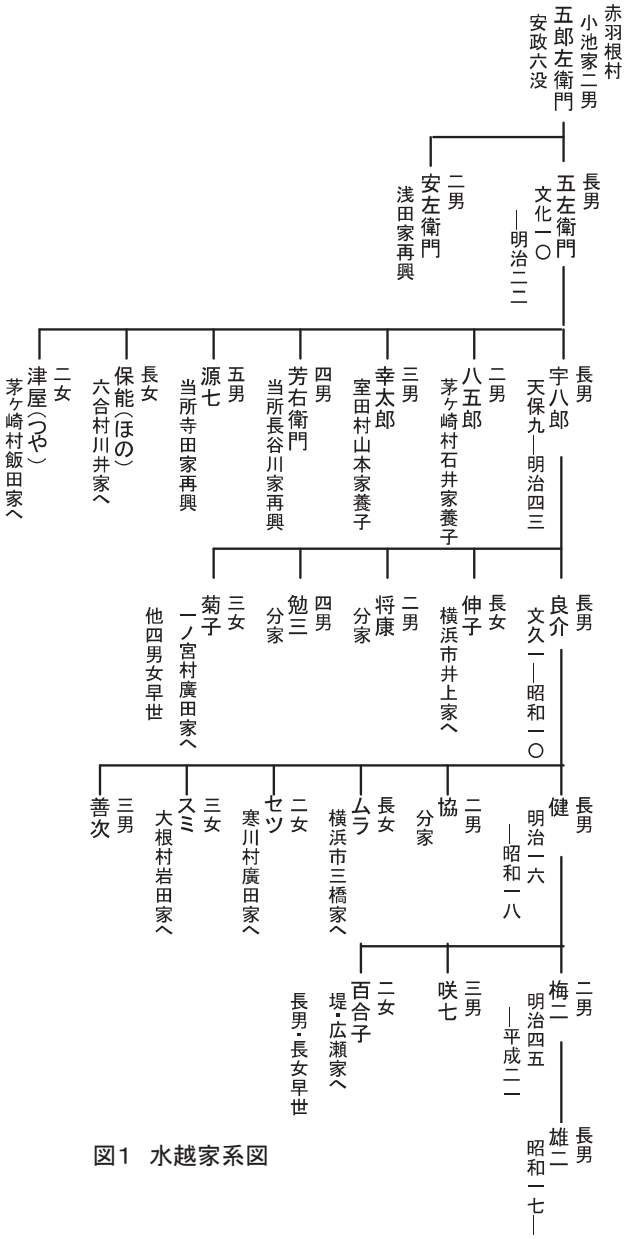

図1　水越家系図

3 水越家長屋門の特徴

(1)外観・構造

水越家長屋門は、規模は梁間２間×桁行８間半で、屋根は現在入母屋造・鉄板葺（図 4,7,8）だが、昭和 25 年頃の写真（図 9）[12] よると、元は切妻造・茅葺だった [13]。水越雄二氏への聞き取りによると、茅葺から鉄板葺への改変は同氏が中学１、２年生だった昭和 30 年頃といい、それ以前は近所総出で茅の葺き替えを行っていたという [14]。

軒は、腕木で桁を持ち出す「出桁造」と呼ぶ方法を採り（図 2)、古写真でも軒高がほぼ現状通りであること、現状の出梁は小屋梁をそのまま伸ばす形式であることから、当初から出桁造と判断できる。妻側は、室内に斜め梁が掛かることから、この端部を斜めに出して出梁とし、けらばを深く取っていたとみられる。なお柱間の基準尺（Ｉ間の寸法）は、桁行方向は６尺であるのに対し、梁間方向のみ６尺５寸と長いが、これは出桁間の真々寸法を 18 尺（６尺×３間）とするよう計画したためである。

高さ寸法は、礎石上から出梁まで約 3.3m で、正面側の腰板も約 1.8m と高い。この腰板は、現在人造石研ぎ出しだが、古写真では現状とほぼ同じ高さの下見板張りだった [15]。屋根の改造以前は、茅葺屋根の勾配が急で棟も高かったから、より大柄な印象だっただろう。

小屋組は和小屋で、二重梁や貫を用いない簡素な造りである（図 3,6)。小屋束・母屋・垂木・野地板など、梁より上の材は全て機械製材で新しく、昭和 30 年代の入母屋造への改変時に取り替えている。小屋材には、出桁の東北隅を「いノ一」とする組み合わせ番付が付けられているが、これも改造時のものである。梁上部には現状以外の位置に束の痕跡は無く、後述の類例等からみても、当初は斜材で支える叉首組だった可能性が高い。

(2)平面

水越家長屋門は、桁行８間半のうち東側３間半と西側３間をそれぞれ室内とし、中央の２間を門とする。このため、全体は左右対称ではなく、東のみ桁行が半間長い。東側は「サギョウバ」、西側は「ミソグラ」と呼んだといい [16]、前者は藁打ちや籾摺りなどの農作業、後者は味噌や醤油の保管場所として用いた [17]（図 4)。

このうち東側は、昭和 44 年に内装や外廻り建具が居住用に改造されており [18]、創建時の姿をとどめない。ただし、南面の門口から３本目の柱に蝶番の痕跡が残り、その高さが現在の床高に合致していることから、当初から床があったことは明らかで、ここに間口１間半の両開戸を設けていたと考えられる（図 10)。聞き取りによると、かつてはこの板張りの上に筵を敷いて作業をしたという。

一方西側は、床はなく土間で、桁行中央で２室に分割され、いずれも上部は簀子天井である。両室とも入口に引違戸を設けるが、西室は入口両側の柱に現状より低い鴨居跡があり、東室は鴨居を柱内側に打付けるなど、いずれも後世の改造である。しかし、柱の足元には痕跡が無いことから、当初から土間だったことになる。

次に中央は、間口１間の両開戸の西側に潜り戸を設ける。親柱は３寸×7.5 寸、冠木は３寸×9.5 寸と太く、扉は欅の１枚板である。この中央部分のみ

図2 南側軒 出桁造

図3 小屋組

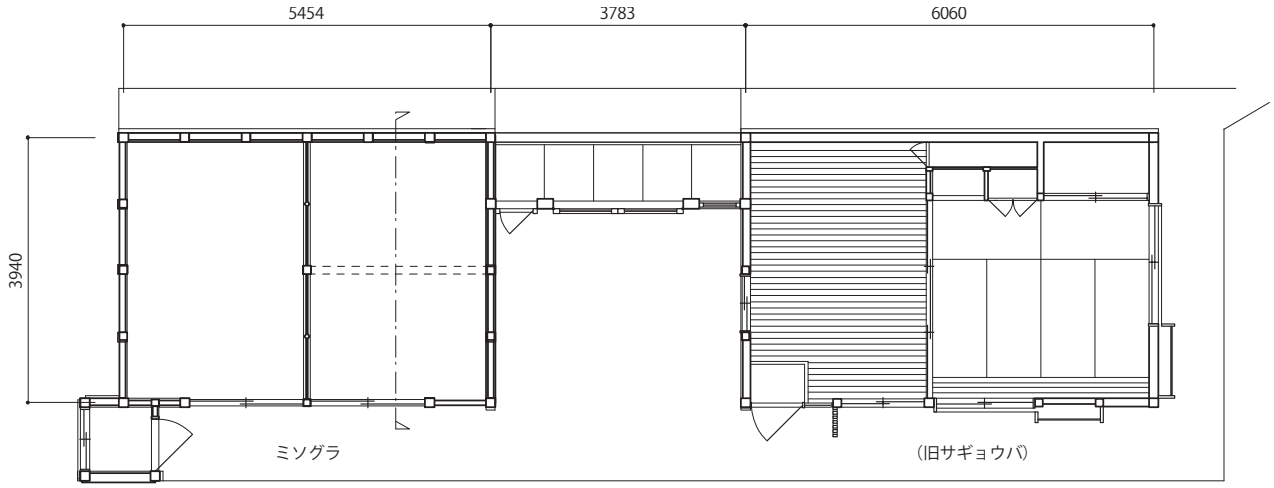

図4　平面図

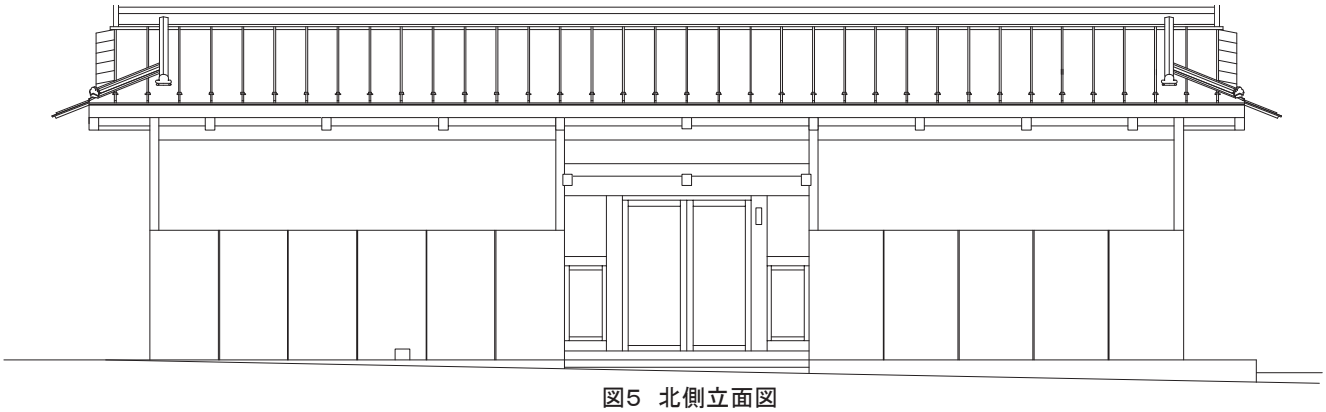

図5　北側立面図

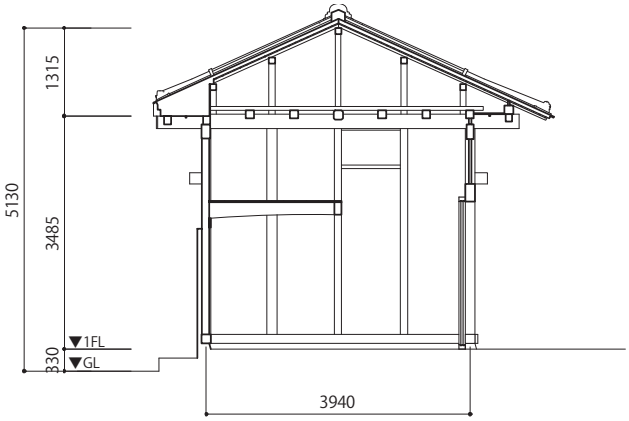

図6　断面図

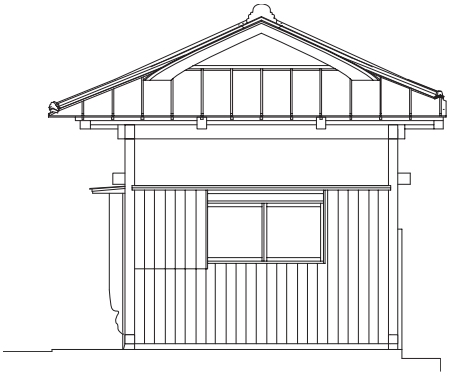

図7　東側立面図

図8　北側外観

図9　昭和 25 年頃の古写真

根太天井で、上部に低い２階を設ける。かつてはここに麹を保管したという[19]。根太を支える３本の梁を出梁風に突き出し、出桁造の軒と相まって骨太い外観を構成する。なお、背面側のみ２階に硝子窓を設けるが、桁に残る木舞の痕跡から、当初は正面側と同じ漆喰壁だったことがわかる。

(3) 類例との比較

周辺地域に現存する長屋門として、福原家長屋門(図 10, 11、市指定、藤沢市渡内から同市新林公園に移築、江戸後期)[20]、関水家長屋門(市指定、大和市福田、江戸末期)[21]、大津家長屋門(市指定、大和市下和田、江戸末期)[22]、牛久保家長屋門(市登録、相模原市緑区元橋本町、江戸末期)[23]などがある[24]。

いずれも梁間は２間ー２間半、桁行は８間ー10 間程度で、長屋部分を土間の納屋・灰屋と板敷の作業場で構成する点が共通し、水越家長屋門も一致する。また、漆喰壁に高い腰板を廻す外壁、出桁造の軒、門扉の構成も典型的だが、屋根は茅葺の場合、福原家・大津家のような寄棟造か、関水家のような入母屋造が一般的で、水越家のような切妻造は極めて特異である。大津家のように寄棟造の妻側を切り上げて２階の開口を採る例があることを考えれば、水越家は妻側により大きく開口を採るため切妻造を選んだと推測できる。

4 水越家長屋門の建築年代

(1) 水越家の普請史料

この水越家長屋門は、『茅ヶ崎市の歴史遺産』によると「江戸時代末期、大工でもあった水越五郎左衛門が建てた」とされ、これは先代梅二氏への聞き取りによるという。ただし、現存する門は先述の通り屋根を大きく改変しているため小屋材が新しく、調査では棟札や墨書は発見できなかった。このため建築年代について、水越家所蔵の史料から再検討する。

水越家の建築については、下記の５点の史料が存在する[25]。

①明治 11 年３月『水越氏邸地家作之方位』
②明治 33 年９月『水越氏家相全図』
③明治 33 年９月『工作并職人附込帳』
④明治 35 年６月 23 日『新宅普請附込簿』
⑤明治 45 年３月『工事関係簿』

以上のうち、①と②は家相図で（図 13, 14）、①は依頼者の名が無いが、年代からみて宇八郎の代に当たり、②は藤沢大富町（現藤沢市西富）の家相見・麻生今助[26]によるもので、「主人四十歳」との年齢から良介の依頼とみられる。③は、職人の出面や材料購入を記した簿冊（以下、普請帳と総称）で、記録が②の家相図と同じ明治 33 年９月 26 日に始まり、明治 36 年５月まで続くことから、②と③は対を為す史料であり、②の家相図はこの工事のいわば完成予想図に当たるとみられる。④は明治 35 年に古家を購入して移築する内容で、時期からみて良介の次男協の分家用[27]と判断でき、⑤は明治 45 年３月から大

図 10 東側部分 入口廻り痕跡(右写真の〇部分を拡大)

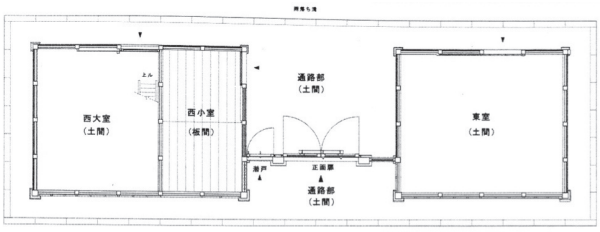

図 11 福原家長屋門平面図(藤沢市、註 20 より転載)

図 12 福原家長屋門外観(藤沢市、註 20 より転載)

正６年７月までの修繕および水島武助[28]の居宅新築の記録である。

２枚の家相図を比較すると、明治 11 年の①では街道に面する位置に梁間２間×桁行５間の「物置」と、独立した「表門」を描くのに対し、明治 33 年の②では現状とほぼ同形状の長屋門を描く（図 15, 16）。したがって現存する長屋門は、明治 11 年ー33 年の間に建てられたか、または③の普請帳に示される明治 33 年の工事で建てられたか、いずれかになる。

(2) 建築の経緯

そこで、③の普請帳を整理すると、以下の経緯が明らかとなる。

まず、明治 33 年９月 26 日から 10 月 29 日にかけて、鳶の小川助次郎により「居宅移轉」を行い、続いて 11 月５日から 12 月９日に鳶の坂和助二郎により「文庫蔵移動」を行った。①と②の家相図を比較すると（図 17, 18）、母屋が①では北向き、②では東向きで異なるが、平面は土間が右勝手で、上手に８畳の主室など４室を置き、土間境に最も大きい部屋を採る点が共通し、②は①の母屋を時計回りに 90 度回転して移動し、間仕切りや土間幅を改造したことがわかる。同様に蔵は、①では母屋の東に１棟、南に２棟が分散して建つが、②ではこれら３棟が東に一列に配されていて、やはり曳家によって配置を整えたことになる。さらに、翌 34 年２月 23 日ー26 日には「灰小屋移転」も行って、②の家相図に描かれた建物のうち、長屋門以外は全て①の既存建物の曳家・改造だったことが判明する。

一方、職人の出面を各月３期に分けてまとめたものが表１・図 19 である。まず大工は、明治 33 年 10 月４日から働き始めるが、工数が増えるのは「居宅移転」後の 11 月上旬からで、11 月中旬に最大となる。その後一旦減少し、12 月中旬ー下旬に再び激増する。また木挽は、４人の名があり、いずれも「居宅移転」着手前の９月下旬から働き、その延べ人数は 12 月下旬までで 97 人半にのぼる。この木挽の工数は、同じ茅ヶ崎市内の旧和田家住宅（安政２年・1855、旧所在地茅ヶ崎市萩園、現民俗資料館）の母屋新築[29]と比べると、和田家の竣工までの工数 161 人の約６割に当たり、和田家の母屋が 11 間半×５間半と規模が大きいことを考えれば、水越家の工数は極めて多い。さらに屋根屋も、11 月 20 日ー25 日に延べ 11 人半、12 月 14 日ー21 日に 23 人半おり、和田家住宅新築の屋根屋 80 人半の半数近い工数がある点が注目できる。先述の通り、明治 33 年の工事は大部分が既存建物の曳家・改造で、木挽が大量に製材する必要も、屋根を葺く必要も本来無く、大工の 12 月下旬までの延べ人数が 183 人に上ることを考え合わせれば、何らかの新築が行われた可能性が高い。この場合、その建物は家相図②のみにある建物、すなわち長屋門が該当する。

そこで、木挽・大工・屋根屋の仕事時期の関係をみると、木挽の仕事が一段落した 10 月下旬から大工の仕事量が増え、11 月下旬に一旦収束した後、12 月中旬に屋根屋が仕事をしていて、製材・建方・屋根葺という新築工事の工程とよく合致する。さらに、12 月１日に代金を支払った「開き戸弐枚」は、使用箇所が②の家相図の建物のうち長屋門の中央門扉または東側入口しかなく、同様に 11 月 20 日に購入した「槻（中略）八尺弐枚」は中央門扉の高さと合致する。

したがって、以上の工程は長屋門建築のためであり、12 月中旬の屋根葺が長屋門のものとみられることから、明治 33 年末に完成したと考えられる。

他の建物については、まず母屋は曳家完了の前後に大工が約 20 人あり、これが外回りの改修や調整と考えられる。①と②の家相図を比較すると、①では１室だった土間寄付が、②では２室に区切られ、背面側に半間増築されており、またその上手側の２室も部屋境の押入等が無くなっている。これらの改造は、明治 33 年 12 月中旬に「硝子」「紋硝子」の購入、同年 12 月ー翌 34 年１月にかけて畳の購入や畳屋の仕事があることから、同時期の仕事とみられる。また、母屋の向きを変え、土間下手側を１間分縮小したため、妻側に新たに大戸口を設けたが、「大戸新調弐間并不足用錺代」を明治 34 年２月 22 日に支払っていることから、この頃完成したと考えられる。

この明治 33ー34 年の工事を担当した職人は表１の通りである。大工の真壁秀五郎は、「大秀」を屋号

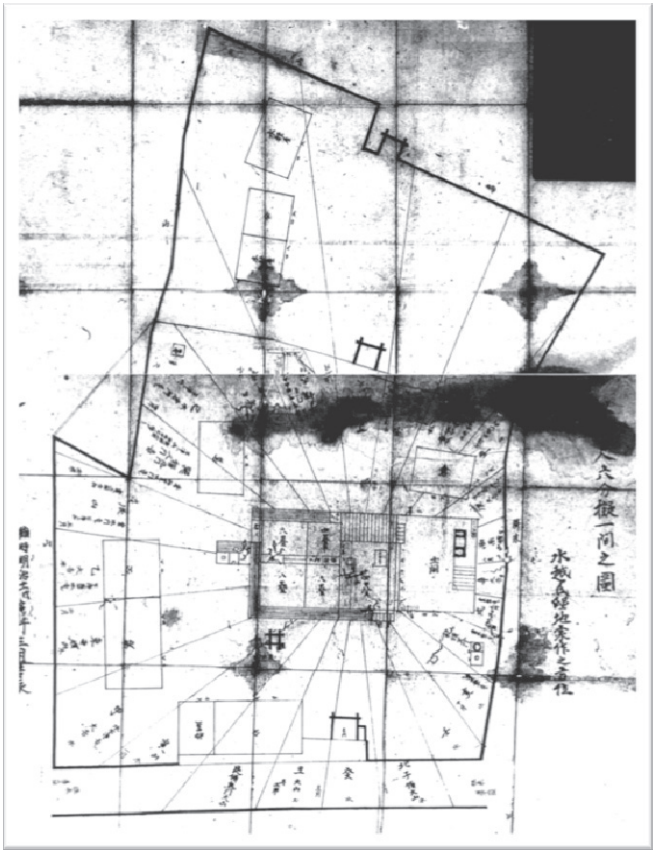

図 13　明治 11 年3月『水越氏邸地家作之方位』(水越雄二氏蔵)

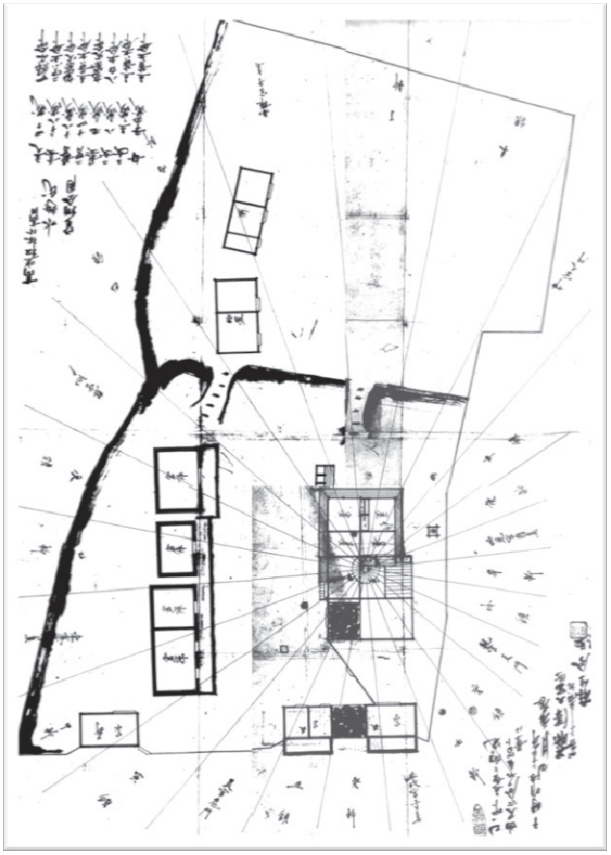

図 14　明治 33 年9月『水越氏家相全図』(水越雄二氏蔵)

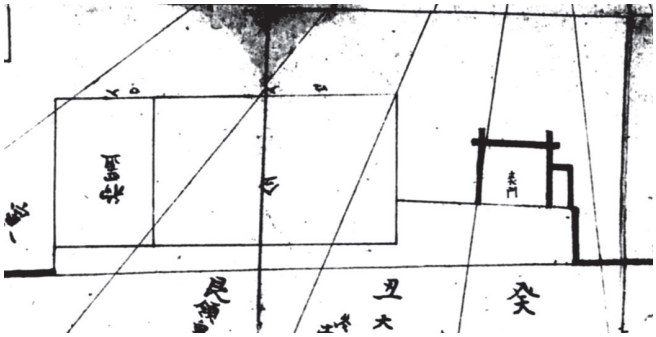

図 15　図 13 の門部分拡大

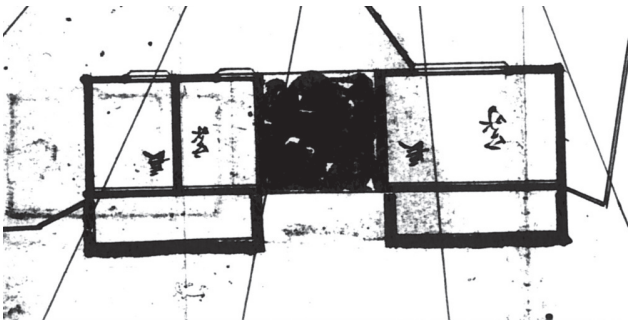

図 16　図 14 の門部分拡大

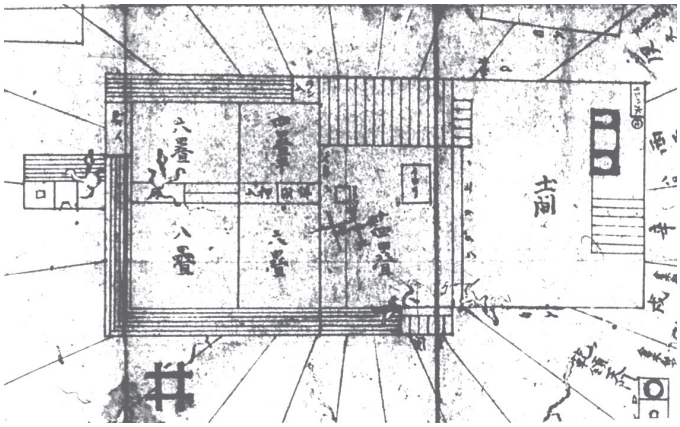

図 17　図 13 の母屋部分拡大

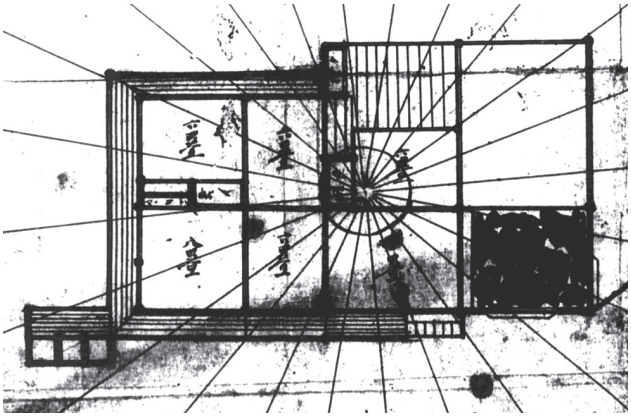

図 18　図 14 の母屋部分拡大

職種		鳶	鳶	杣職	木挽	木挽	木挽	木挽	大工	左官	左官瓦職	屋根職	屋根職	銅壷職	建具屋	建具屋	畳屋	石屋	植木職
氏名		小川助次郎	坂和助二郎	珠田曽右衛門	久保田八五郎	森亀吉	川辺庄五郎	森松七郎	真壁秀五郎	久次郎	久次・大五郎	浅岡喜右衛門	川井由五郎	飯田幸蔵	大工秀五郎口	清二郎	常吉	池田松五郎	川本金十郎
明治33 9月	上																		
	中																		
	下	36		5.5	5.5	2	4	1										4	2
10月	上	33		1.5	2	5.5	7	7.5	11			3							
	中			1	5	2	7.5	7	13.5				3						
	下	13		5	3	5	3.5	4	11			1						2	
11月	上		35.5	1.5			6		24.5									9	2
	中		55.5	2			4		36.5	2				1				6	2.5
	下			1		1	2.5		6	6.5		11.5						2	
12月	上		13				3.5		15.5				7					3	
	中			1			5		27			23.5	9	4	5			2	
	下			2		1	3		38			4		5	10			7.5	
明治34 1月	上			1					8						6				
	中			1			1.5		12.5						4		5		10
	下			1			5	4	14								1.5	6	10
2月	上			2					8									3.5	19.5
	中			2			4.5		23.5	8				1					17
	下		7						4.5										
3月	上								19					6					
	中								11.5										
	下			1			2		4										
4月	上					3	2		7		2				2.5				
	中										9				3				
	下														5				18
5月	上														10				5
	中														5.5				
	下														5				
6月	上														4.5				
	中										1								5.5
	下														10				13.5
7月	上														5.5				2.5
	中														5				12
	下										30				6	4			12
8月	上										34				1	7			
	中										12					4			
	下															5.5			
9月	上															6			
	中															1.5			
	下															6			
10月	上										17								
	中																		
	下				2														

表1　明治 33 年『工作并職人附込帳』にみる職人の工数（単位：人）

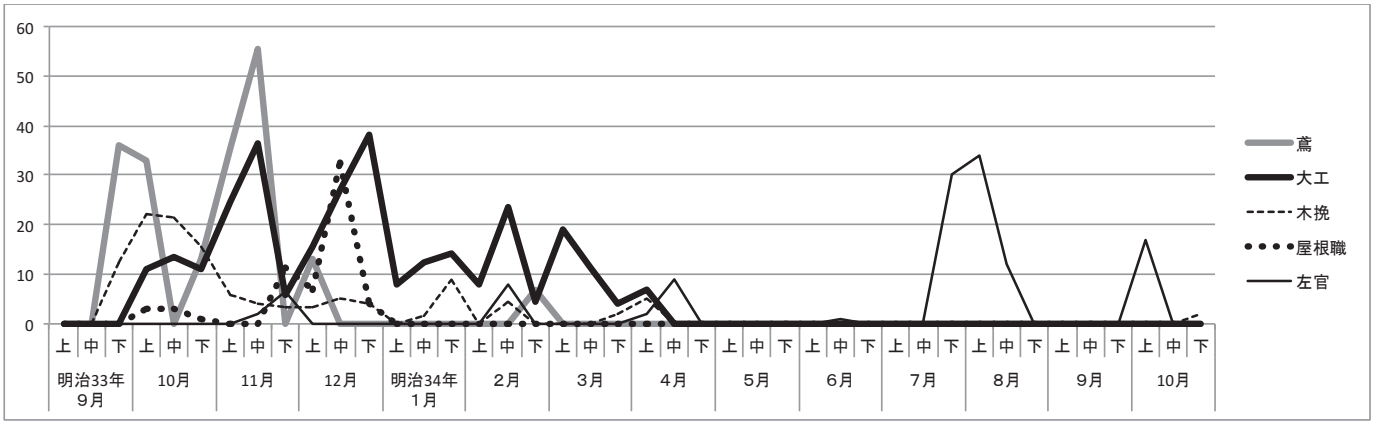

図 19　明治 33 年『工作并職人附込帳』にみる職人の工数（単位：人、主要職人に限定した）

とし[30]、前掲の明治 35 年、45 年の普請帳でも息子とみられる真壁秀次郎(秀二郎)と共に名があって、水越家の当時の御出入り大工だった。真壁秀次郎は、大正 14 年の茅ヶ崎町役場新築の棟札[31]に「棟梁、相模國小和田住人、勲七等、藤原秀眞真壁秀次郎」と名があり、小和田村（現新栄町）在住で、茅ヶ崎では名の知られた棟梁だった[32]。

(3) 建築の背景

ところで、なぜこのように大掛かりな配置変更を行ったのだろうか。

２枚の家相図を比較すると、明治 33 年の配置では母屋の式台が家相上最も吉相に当たる寅卯の方角を向き、また３棟の蔵も蔵を吉相とする方角に合致することから、変更が家相への適応を目的としたことは明らかである。この明治 33 年当時、水越家は宇八郎とその長男良介が共に存命だったが、家相図の作成を良介が依頼している通り、すでに家督相続し、宇八郎は赤羽根村に別居していた[33]。相続の時期は明らかではないが、土地台帳の記録では遅くとも明治 26 年には良介の名で土地購入が行われ、その２年前の明治 24 年に良介が松林村長に就任していることから、この頃すでに家督を継いでいたことになる。良介は、明治 34 年の工事終了と同時期に松林村長を辞めて郡議会議員となり、さらに２年後に県議会議員選挙に初出馬して当選した。自邸の大規模な整備は、こうした当主良介の社会的活動の基盤として行われた可能性が高いと考えられる。

なお、明治 33 年の家相図と現状を比較すると、長屋門は全体の規模と門部分の寸法は一致するものの、東側は桁行が３間、西側が３間半で、東側を２室に分割するなど、現状と東西が逆である。改造の可能性も検討したが、東西の寸法を入れ替えるほどの大掛かりな変更の痕跡は無く、かつこの家相図が工事着手前に描かれていることを考えれば、家相図は計画図であって、実際の建設の段階で変更したものと判断できる[34]。

５ 水越家長屋門の前身建物

ところで、現存する長屋門のもうひとつの特徴として、古材の使用が挙げられる。東側は改造が著しく検討が難しいが、西側は隅柱以外の柱に転用材を用い、小屋組の梁や敷梁にも脈絡の無い痕跡を持つ材が散見される（図 20）。

注目されるのは、明治 13 年に近隣の円蔵村（現茅ヶ崎市円蔵）から水越家が古家を購入している点である。明治 13 年６月の年紀を持つ「建家土蔵其他売渡證券」[35]によると、「相模国高座郡円蔵村壱番地住居」の「圓倉清兵衛」から、「萱葺、土蔵、壱棟」と「同、平長屋、壱棟」を金 15 円で購入している。付属する絵図によると、圓倉清兵衛家には「土蔵」「肥屋」「平長屋」「本屋」「物置屋」の５棟の建物があり、水越家はこのうち「土蔵、拾五坪」と「平長屋、拾六坪」を購入したことがわかる。

このうち「平長屋」は、16 坪という規模と図に描かれた横長なプロポーションからみて、梁間２間×桁行８間と推測でき、桁行を半間伸ばせば現在の長屋門と一致する。特に、梁間が一致することから、小屋組の梁はそのまま使用できる。また、現在の長屋門の西側の間仕切りには、斜めに鉈目を入れた柱が用いられている（図 21）が、これは壁土を付きやすくするための細工で、元は柱を塗り籠める土蔵な

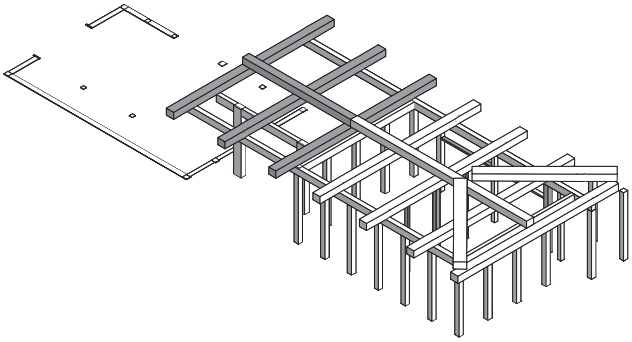

図 20　古材の転用部位（グレーが古材。改造により新材のみの東側および小屋組の梁より上は省略した）

図 21　西側間仕切りの転用柱

どに用いられていたとみられる。

したがって、現在の水越家長屋門の古材は、明治13年に円蔵村から購入した「平長屋」「土蔵」の材を転用したものと推測できる。ただし、現在の長屋門は、「平長屋」と規模がほぼ一致するものの材の転用は一部に留まり、そのまま移築したのではない。特に、新材と古材の使用箇所に注目すると、隅柱は全て新材である一方、小屋梁は根太天井で隠れる中央３間分のみ古材であって、古材は人目につきにくい部分に集中する。

古材の転用については中村琢巳氏の研究があり[36]、近世の民家では頻繁に建築工事、特に新築ではなく修繕や増改築が行われたこと、その備えとして古材が恒常的に備蓄されていたことを指摘している。かつての木造住宅は、新築して寿命が来たら取り壊すという単純なサイクルではなく、修繕や改築によって長く使い続けられ、さらに取り壊し後の材もストックして他に転用するという、多様な生涯像を持っていたのである。

水越家もまた、この円蔵村の「平長屋」「土蔵」以外に、明治35年にも「島崎弥五郎居宅一棟」を購入して分家用の住居に充てており[37]、明治後期にも古家や古材の利用が頻繁だったことを窺わせる。また、円蔵村の古家の購入から長屋門の建設まで20年経つことを考えれば、長屋門以外にも材が転用された可能性があり、水越家のような有力家で古材を用いた点に、裾野の広さをみることができる。

5 おわりに

水越家長屋門は、棟札は無いものの家相図と普請帳が現存し、明治33年末の完成と判明する。屋根形状を変更した点は惜しまれるが、規模や外廻りの仕上げはほぼ当初の姿を残し、また平面も東側は改変されたものの西側は改造が無く、建築当時の用法を伝える。先述の長屋門の遺構のほとんどは建築年代が様式からの推測に過ぎず、水越家長屋門は年代的指標となりうる点で貴重である。

長屋門は、江戸期には名主等のみ建築が許され、近代以降その対象は広がったものの、やはり家格や富裕の象徴とされた。長屋門建設当時の水越家は、近代以降の田畑の集積により、大地主としての最盛期に当たり、当時の当主・水越良介は茅ヶ崎における改新派の重鎮だった。

また水越家長屋門は、向かいに位置する隣村赤羽根村の鎮守・神明社の鳥居や大けやきと合わせ、旧大山街道の往時の景観を残す貴重な要素である。長屋門東側に続く大谷石積みの塀は、昭和30年頃の主屋の建て替え時の改変で、元は小屋根付きの杉板塀だった。その姿は先述の昭和25年頃の古写真でも確認でき、長屋門の腰板と類似性が強いことから、より統一された景観を有していただろう。

すなわち水越家長屋門は、幕末ー明治期の長屋門の典型的な存在であるとともに、旧大山街道沿いの歴史的景観を形成し、かつ茅ヶ崎の歴史を語り継ぐ貴重な遺構と位置づけられよう。

〈註〉

1)『茅ヶ崎の歴史遺産』茅ヶ崎史誌編集委員会、2004年。

2)『神奈川県の地名』平凡社、1984年。

3)後掲註 7 など水越家宛の文書等に長田家の要人の名がある。

4)水越家の墓所は茅ヶ崎市高田58の高田緑地に所在。

5)鶴田あしかび「発刊を思い立ちて」(『あしかび叢書第三篇』あしかび舎、1959年所収）にも水越家の五郎左衛門以降の系図があり、参考とした。

6)註５に同じ。

7)水越家文書（水越雄二氏蔵、茅ヶ崎市教育委員会市史編纂室マイクロ複写)。「相州高座郡高田村組頭 五左衛門、此度名主介被仰付候、此段申達候、慶応二寅年三月 岡村隼太」。

8)『近代茅ヶ崎の群像』茅ヶ崎史誌編集委員会、2007年。

9)「水越良介小伝」『法政新聞』昭和３年６月５日、『茅ヶ崎市史第２巻　資料編(下)近現代編』茅ヶ崎市、1978年、所収。

10)大西比呂志「町三役と町会議員の変遷―戦前期の茅ヶ崎町と町政(一)」茅ヶ崎市史研究13、1989

年３月。『茅ヶ崎市史４　通史編』茅ヶ崎市、1981年、など。

11)註８に同じ。

12)水越雄二家所蔵、註１『茅ヶ崎の歴史遺産』所収。

13)後述の普請帳でも、大正２年に「長家之分」として茅購入の記録があり、当初から茅葺だったことが確認できる。

14)大型車の通行に支障があるとの理由から、平成初年に道側の軒を切っている。

15)腰板は、門の両側面では 1.3m ほどと低く、現在は門の正面寄りのみだが、痕跡からみてかつては背面寄りにも続いていた。

16)水越雄二氏への聞き取りによる。

17)註１『茅ヶ崎の歴史遺産』。なお、同書の記載は、水越梅二氏への聞き取りによるという。

18)註 16 に同じ。

19)註 17 に同じ。

20)大野敏「旧福原家長屋門の保存に関する中間報告」藤沢市文化財調査報告書第 42 集、藤沢市教育委員会、2007 年。

21)『大和の民家』大和市教育委員会、1982 年。

22)註 21 に同じ。

23)『相模原の民家』相模原市教育委員会、1986 年。

24)茅ヶ崎市内に現存する長屋門としては、川口家（茅ヶ崎市芹沢）や布川家（同前）があるが、年代等詳細が不明である。

25)水越雄二氏蔵、茅ヶ崎市教育委員会市史編纂室マイクロ複写。

26)麻生今助については、宮内貴久『家相の民俗学』(吉川弘文館、2006 年)など。

27) 協の分家の年は不明だが、明治 33 年の家相図に「次男十四歳」とあり、明治 35 年当時は 16 歳だった。

28)水島武助については不詳。

29)小沢朝江「旧和田家住宅の普請と職人」茅ヶ崎市文化資料館調査研究報告書 18、2009 年。

30)明治 33 年の普請帳で、大工として「真壁秀五郎」と「大秀」の記載が混在する。

31)茅ヶ崎市文化資料館蔵。

32)『写真集 茅ヶ崎きのうきょう』茅ヶ崎市、1987年。

33)水越宇八郎墓碑銘「晩年更構一戸於赤羽根下令隠居」。

34)家相図②に描かれた３棟の蔵のうち、最も北側は「穀蔵」と呼ばれ、位置・規模・呼称とも現存する土蔵と合致するが、南隣りの「文庫蔵」は、水越雄二氏によれば、母屋の取り壊し以前は母屋の北西側に存在したといい、やはり家相図②と配置が相違した。

35) 水越家文書（水越雄二氏蔵、茅ヶ崎市教育委員会市史編纂室マイクロ複写)。

36)中村琢巳「木造住宅のライフサイクルに関する歴史的研究 −近世史料にみる資源保全型の建築活動」東京大学博士論文、2008 年。

37)水越家文書、前掲普請帳④。

*1　東海大学工学部建築学科・教授